

Title	John Donne : Songs and Sonetsに於けるDeathについて
Sub Title	Death' image in John Donne's Song and Sonets
Author	山田, 隆一(Yamada, Ryuichi)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1966
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.22, (1966. 11) ,p.84(20)- 92(12)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00220001-0092

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

John Donne: *Songs and Sonets* に於ける Death について

山 田 隆 一

John Donne の *Songs and Sonets* (1631) にあらわれた death に関する image の特性について記したいと思う。この詩篇中には death に関する imagery が極めて多数見うけられる。関連語のみを列挙してみても, ashes (1例), bones (2例), carcass (1例), epitaph (2例), ghost (6例), grave(s) (8例), passing bell (1例), tomb(s) (4例), urn (1例), worms (1例) という工合で, sleep も Donne 自身によって deaths image と記されている箇所があり (*Womans constancy*, l. 10), 更に詩の title として, *The Apparition*, *The Will*, *The Funerall*, *The Relique*, *The Dissolution*, *The Expiration* などがみられる。そして death なる語は全部で14の使用例があり, dead 11, die 21 を加えると, 以上述べたものだけでも総計80例の多きにのぼっている。*Songs and Sonets* に収められた詩は55篇である事を考慮すればこれはかなりの頻度であり, death という問題に対する Donne の関心の異常さを示しているといつてよかろう。この事は, この詩篇中に用いられた他の形容詞・名詞・動詞の頻出度数を調査し, 又, 同時代の他の詩人たちについての同様な調査と比較した場合に, 計量的に明らかになることである。

Josephine Miles は, その著 *Eras & Modes in English Poetry* (Second edition, 1963) に於て, 英米文学史上各時代の代表的詩人の代表的詩集を調査し, 1,000 行中に10回以上使用された形容詞・名詞・動詞(但し数量形容詞・固有名詞・助動詞及び to be, to have, to do, to say を除く)を詩人別に一覧表に示している。Donne の場合には *Songs and Sonets* が取りあげられており, その詩篇中から摘出された主要語彙として, 次の様な結果が提示されている(同書 p. 267)。

形容詞: bad, false, good, new, poor, true.

名 詞: day, death, eye, face, fear, heart, love, man, name, soul, sun, tear, thing, world, year.

動 詞: come, die, fall, find, give, go, keep, know, love, make, see, show, take, tell, think.

しかし, *Songs and Sonets* の全体について調査を試みてみると, 上記とは少し異なる結果が得られる。いま, 頻出度数の多い順に主要語彙を列記すると, 次の如くな

る。(‘Ing’-form は動詞の中に入れて数えることにする。)

形容詞: good (34回), true (22), new (21), false (10)。〔他に poor (9), great (9), brave (8) が主なもので, Miles が挙げている bad は僅か5回を数えるにすぎない。〕

名詞: love (144), heart (37), soul (36), man (36), eye (31), day (23), tear (22), thing (22), lover (19), woman (19) [Miles の表に追補すべき語], sun (17), name (15), death (14), face (12), fear(12), year (11)。

動詞: make (68), love (45), think (40), know (40), go (39), see (33), give (31), die (26), find (23), come (21), grow (21) [これも Miles に追補すべき語であろう], take (20), hate(16), tell(16), show(15), fall (14), get (14), keep (14), live (14), mean (13), write (12), kill (12), move (11), send (11)。

これで見ると、圧倒的に多く使用されている語は love (名詞・動詞併せて 189回), 次いで前述の如く die, death 其他, 死に関する imagery を含んだ語群が重要なものとなる。

次に, Donne と同時代の詩人達が, love 及び death の二群に属する語をどの程度愛用したかについて調べるべきであるが, 幸いにして Josephine Miles の別著 *The Continuity of Poetic Language* (1965) により, その大略をうかがい知ることが出来る。同書中の *Language of Poetry in the 1640's: Tables I-III* (pp. 28-36) から, love, death, die の三語を検出する事が出来るのである。この表は, 1640年代の詩人20人——Christopher Harvey, John Suckling, George Wither, Ben Jonson, John Donne, Henry Vaughan, Abraham Cowley, James Shirley, Robert Herrick, John Denham, John Cleveland, Richard Lovelace, Thomas Carew, George Sandys, John Dryden, Francis Quarles, Richard Crashaw, Edmund Waller, John Milton, Henry More——の詩, 各1,000行中に10回以上用いられている語を, 前著と同様に調査したもので, Donne の text として *Songs and Sonets* を選んでいる点も同様である。これによると, love なる語は, 20人中で, Harvey, Wither, Vaughan, Milton を除く16人が頻用する語であるが, 就中 Donne の使用例数が群を抜いており (110回), 第2位の Carew (65回) を遥かに引きはなしている。序でに引用すると, 16人中で一番すくないのは Quarles (10回) である。

さて death なる語についてはどうか。これは, 同表によると, 20人中, Donne を含めて僅か6人のみが10—20回程度用いているにすぎず, die も同じく6人がそれぞれ10回程度使用せる語となっている。その詩人名を記せば次の通りである。

Death: Donne (10回), Vaughan (10), Lovelace (10), Sandys (10), Dryden (15), Crashaw (20)。

Die : Donne (10回), Suckling (10), Cowley (10), Herrick(10), Carew(10),

Dryden (10)。[Miles の示している回数は、概算である。]

両語とも用いているのは Donne と Dryden のみである。しかし、Dryden の text が、“Upon the Death of Lord Hastings” in *Lacrymae Musarum*, 1649; and later elegies in *Poetical Works*, ed. W. D. Christie と註記されているのを知れば、とり扱われている詩の内容からいって、death, die が頻出するのは、この場合、むしろ当然と言えよう。従って、上記の詩人の中では Donne のみが最も顕著にこれらの語を愛好している、という結果を得る。

しかし、翻えて当時一般の風潮をみるに、17世紀の文学には死の問題が一種の強迫観念の如く瀰漫しており、たとえ死が主題として取扱われてはいない場合でも、当時の主なる文学作品の底流をなす melancholy の多くは、その背後に死という問題をひそめていたのであった。Robert Burton の *The Anatomy of Melancholy* (1621) や、Sir Thomas Browne の *Hydriotaphia: Urne-buriall* (1658) などは、その典型的な作品といってよからう。Shakespeare も、死の威力を前にした人間の無力さを、手をかえ品を替えて、我々に示そうとしているのである。Life は所詮 death に隷属するもの、

.....a breath thou (*i. e.* life) art,
Servile to to all the skyey influences,
That do this habitation where thou keep'st
Hourly afflict. Merely, thou art death's fool,
For him thou labour'st by thy flight to shun,
And yet run'st toward him still.

(*Measure for Measure*, 3. 1. 18-3)

という表現の背後に、我々は彼の深い歎息を聞く思いがする。John Webster, John Ford などのいわゆる恐怖悲劇においては、くえ朽ちてゆく肉体、墓場の暗澹たる恐怖などが、殆ど病的とも言える程の執拗な関心の的になっている事は、これらの作品に接するものの容易に認め得るところである。注目すべきは、以上の如き風潮の中であって、当時の詩人の中でも特に Donne が、死への関心を(恋愛詩中においてさえ)極めて顕著に示している、という点なのである。Death は、彼に終生つきまとして離れなかった観念であり、後には birth という事さえも、彼にあっては death の開始と見做されている程である。彼の最後の sermon となった“Death's Duell”には、次の如く述べられている。

.....this *exitus a morte*, is but *introitus in mortem*, this *issue*, this deliverance from that *death*, the death of the *wombe*, is an *entrance*, a delivering over to another *death*, the manifold *deathes* of this *world*. Wee have a winding sheete in our Mothers *wombe*, which grows with us from our conception, and wee come into the world, wound up in that *winding sheet*, for we come to *seeke a grave*

⁽¹⁾. (*The Sermons of John Donne*, Vol. X, p. 233)

以上、love と death が *Songs and Sonets* における Donne の二大関心事であることを考察して来たわけであるが、此の二者は彼にあっては無関係のものではない。それで次に、love との関連において、Donne の death に関する imagery の特性を調べてみたいと思う。Milton Allan Rugoff の *Donne's Imagery* (1939) には此の問題についての言及がみられるが、それに従うと、love それ自体が death を意味するのが Donne の考方であるという事になる (同書 p. 181)。

I cannot say I lov'd, for who can say
Hee was kill'd yesterday?
Love with excesse of heart, more yong then old,
Death kills with too much cold;
Wee dye but once, and who lov'd last did die,
Hee that saith twice, doth lye:

(*The Paradox*, ll. 5-10)

が Rugoff の援用するところである。

しかし、love と death に関する Donne の真意は果してそこにあるのであろうか。因みに、Herbert J. C. Grierson によれば、*Songs and Sonets* における Donne の恋愛詩は3グループに分類される。即ちその第1は、皮肉な wit にものを言わせて女性の弱点をことさらに誇張してみせるもの、第2は、やはり wit を利かせてはいるが、清純な恋人との恋のよろこび、別れの悲しみを熱情的に歌いあげているもの、第3に、これはその数から言えば少ないのであるが、Petrarch 風の恋人のつれなさに或はうち拉がれ、或は悶々の愁訴を行なう、という内容のものである (Grierson, *The Poems of John Donne*, Vol. II. p. 9)。

この第1のグループに属する詩は別として、Donne が理想と考えていた love というものと、death の imagery との間には確かに密接な関係が存在する。Donne 自身の言葉によれば、この love は death を超越して永遠に不朽の魂に結びつくものであり、単純に death そのものを意味するとは考えられない。

順を追って述べるなら、先ず Donne の理想とする love は、恋人たる相手と soul が合一して、自他の別を消失し、恋人同士二者一体となった愛である。*The Extasie* に見られる次の詩行はそれを証するものであろう。

If any, so by love refin'd,
That he soules language understood,

註(1) 此の思想は、今世紀に入ってから Dylan Thomas に於て大いなる共鳴者を見出し、数々の名詩篇 (“A refusal to mourn, the death, by fire, of a child”, “Among those killed”, “Ceremony after a fire raid”, “Holy spring” など) の生れる機縁となったのは興味深い。(cf. William York Tindall, *A Reader's Guide to Dylan Thomas* (1962), p. 217)

And by good love were grown all minde,
 Within convenient distance stood,
 He (though he knew not which soule spake,
 Because both meant, both spake the same)
 Might thence a new concoction take,
 And part farre purer then he came.
 This Extasie doth unperplex
 (We said) and tell us what we love,
 Wee see by this, it was not sexe,
 Wee see, we saw not what did move :
 But as all severall soules containe
 Mixture of things, they know not what,
 Love, these mixt soules doth mixe againe,
 And makes both one, each this and that.

(Ll. 21-36)

この合一せる魂の愛は、他の場所でも屢々うたわれている。例えば次の如くである。

But we by a love, so much refin'd,
 That our selves know not what it is,
 Inter-assured of the mind,
 Care lesse, eyes, lips, and hands to misse.
 Our two soules therefore, which are one,
 Though I must goe, endure not yet
 A breach, but an expansion,
 Like gold to aery thinnesse beate.

(*A Valediction: forbidding mourning*, ll. 17-24)

そして、これにより新なる魂が誕生する。この魂は、合一せる魂より昇華したものであり、恋人たちにとっては全世界の縮図にも等しいものである。*The Extasie* が、Donne の此の考を最もよく物語っていると見えよう。同詩からさきに引用した詩行のあとに、次の様に述べられている。

When love, with one another so
 Interinanimates two soules,
 That abler soule, which thence doth flow,
 Defects of loneliness controules.
 Wee then, who are this new soule, know,
 Of what we are compos'd, and made,
 For, th'Atomies of which we grow,

Are soules, whom no change can invade.

(Ll. 41-48)

又、*The Canonization* には次の詩句がみられる。

The Phoenix riddle hath more wit
By us, we two being one, are it.
So to one neutrall thing both sexes fit,
Wee dye and rise the same, and prove
Mysterious by this love.

(Ll. 23-27)

昇華した魂に全世界の縮図を見出す、という考え方も同詩に見ることが出来る。

And by these hymnes, all shall approve
Us *Canoniz'd* for Love :
And thus invoke us ; You whom reverend love
Made one anothers hermitage ;
You, to whom love was peace, that now is rage ;
Who did the whole worlds soule contract, and drove
Into the glasses of your eyes
So made such mirrors, and such spies,
That they did all to you epitomize,
Countries, Townes, Courts : Beg from above
A patterne of your love !

(Ll. 35-45)

この新たに生れた魂は、不滅・不死の存在になる。これが Donne の描く love の理想の姿である。彼が、

What ever dyes, was not mixt equally ;
If our two loves be one, or, thou and I
Love so alike, that none doe slacken, none can die.

(*The good-morrow*, ll. 19-21)

と歌い、又

All other things, to their destruction draw,
Only our love hath no decay ;

(*The Anniversarie*, ll. 6-11)

と述べるのも、同じ思想に基いているものと考えられる。合一せる soul の愛——理想の愛——は不死不滅である、とする考は *Songs and Sonets* の中に一貫して繰返されているテーマの一つであると言ってよい。

次に此の soul と、body との関係について見るに、Donne は、二者の魂が合一するための前提として、肉体の出会いというものを考えていることがわかる。魂は肉

体に宿り、その感覚を通さなければ他の魂と結合出来ない。先に述べたように、Donne の此の愛の哲理は *The Extasie* によく現われているので、同詩より再び引用する。

But O alas, so long, so farre
Our bodies why doe wee forbear?
They'are ours, though they'are not wee, Wee are
The intelligences, they the spheare.
We owe them thanks, because they thus,
Did us, to us at first convey,
Yielded their forces, sense, to us,
Nor are drosse to us, but allay.

(Ll. 49-56)

これは、*Aire and Angels* の次の詩行も併せ考えると更にはっきりする。

But since my soule, whose child love is,
Takes limmes of flesh, and else could nothing doe,
More subtile then the parent is,
Love must not be, but take a body too,
And therefore what thou wert, and who,
I bid Love aske, and now
That it assume thy body, I allow,
And fixe it selfe in thy lip, eye, and brow.

(Ll. 7-14)

Then as an Angell, face, and wings
Of aire, not pure as it, yet pure doth weare,
So thy love may be my loves spheare.

(Ll. 23-24)

以上見て来た Donne の描く理想の love は、次の如く要約されよう。即ち、先ず感覚的な肉体相互の合一を通じて、その肉体に宿る魂が合一・昇華し、ここに新たな魂が生れ、不死・不滅の存在となる。しかもそれは恋人同士にとって全世界の縮図とも言えるのである、と。

従って、恋人同士の肉体が別々に引き離されるならば、以上の過程を進行せしめるのを不可能にし、death を超越した理想の love に到達することが出来ない。ここに於て、Donne の場合、恋人同士の別離という現象と同時に death の imagery が姿をあらわして来る事になる。Donne の death に関する imagery の特性はここに存すると言えるのではなからうか。例えば、*The Legacy* を見ると、

When I dyed last, and, Deare, I dye
As often as from thee I goe.

(Ll. 1-2)

という詩句を見出すことが出来る。この恋人同士の別れが直ちに死と結びつくものとしては又、*A Valediction: of my name, in the window* に於て、髑髏・遺骸といった彼好みの道具立を揃えた上、

As much more loving, as more sad,
'Twill make thee; and thou shouldst, till I returne,
Since I die daily, daily mourne.

(Ll. 40-42)

と述べているのが、その好例であろう。又、

Goe; and if that word have not quite kil'd thee,
Ease mee with death, by bidding mee goe too.
Or, if it have, let my word worke on mee,
And a just office on a murderer doe.
Except it be too late, to kill me so,
Being double dead, going, and bidding, goe.

(*The Expiration*, ll. 7-12)

も挙げる事が出来る。

Donne における此の love と death の、上述の如き関係は、彼の詩想を理解する上に欠くべからざるものである。例えば、*A Valediction: of weeping* の第1聯をとりあげてみる。

Let me powre forth
My teares before thy face, whil'st I stay here,
For thy face coines them, and thy stampe they beare,
And by this Mintage they are something worth,
For thus they bee
Pregnant of thee;
Fruits of much griefe they are, emblemes of more,
When a teare falls, that thou falls which it bore,
So thou and I are nothing then, when on a divers shore.

L. 8 の 'falls' は Helen Gardner, *The Elegies and the Songs and Sonnets of John Donne* (1965) に拠った。(Grierson の text では 'falst' となっている。) さて、此の ll. 7-9 について、Theodore Redpath, *The Songs and Sonets of John Donne* (1956) の解説をみると、'a difficult passage' であると前置きした上で次の如き詳細な paraphrase を載せている。

'My tears are the result of much grief (at the thought of parting from you),
and they are emblems of more grief to come (the grief of being absent from

you); when one of my tears falls, that particular Thou which the tear carried in it also falls, and both my tear and your image perish; and this is emblematic of what will happen when we are parted; you, like your image in the tear, will be nothing too.'

因みに、Gardner は此の部分 (ll. 8-9) に対して次の如く註している。

'When a tear falls the image of thee that it bore falls with it and is dissolved.

In the same way thou and I are dead when parted by the sea between us.'

難解となる理由は、1. 8 から 1. 9 にかけて論理の飛躍があるからであろう。しかし、一見如何に唐突に見えても、1. 9 に於ては、「恋人同士の別れ」という事から nothing 即ち death の image が用いられたものと容易に理解出来る。Redpath も、Donne is continually referring the absence of lovers as a sort of death と附記しているが、何故 absence of lovers が death を意味するのかは、以上縷述して来た理由によるものである。

Donne が、同時代人とくらべて death というものを常に鋭く意識していたのは、Rugoff の説く様に、終生病弱の身に苦しんだという個人的な理由もあるかも知れぬ (*Donne's Imagery*, p. 234)。ともあれ、Donne の *Songs and Sonets* の基調は、愛の光明と死の霧りととの交錯である。そこに見られるのは、love と death の対照による戦慄の効果である。一面 Baudelaire を想起せしめる此の morbidity の世界は、降って18世紀中葉におこる、Edward Young, Robert Blair, James Hervey 等の所謂 graveyard school に脈を伝えるものであるが、理想愛による soul の不滅に信仰を託して救いを求めるという点において、詩人 Donne の姿は18世紀の詩人たちとははっきりと異なっている。